

2021年1月29日

2020年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

新人看護師の勤務終盤の「振り返り」に
おける実地指導者の教育的支援の実態
The Reality of Educational Supports Given by First-Line
Instructors for Novice Nurses at Work-End “Reflections”

19MN001

青池英子

【背景】

新人看護師が実地指導者の支援を受けて看護実践を振り返る意義は明らかになっている。しかし、実地指導者と新人看護師の相互作用に着目し、実地指導者が新人看護師の教育者としてOJT（＝on the job trainingの略、以下「OJT」とする）でどのような教育活動を行っているのかを明確にした研究は管見の限り見あたらない。

【目的】

勤務終盤の振り返りにおける、新人看護師に対する実地指導者の教授的支援の実態を記述する。

【方法】

実地指導者と新人看護師がペアで勤務する日勤の終盤の振り返りの場面に参加観察した。新人看護師に対しては、振り返り終了直後に、観察内容の解釈の確認や実地指導者と振り返ったときに感じたことについてのインタビューを実施した。実地指導者に対しては、参加観察データ収集の後、振り返りの背景にある意図について半構造化インタビューを実施した。これらのデータから勤務終盤の振り返りの実態および実地指導者の意図を明らかにした。本研究は聖路加国際大学の倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号 20-A034)。

【結果】

勤務終盤の振り返りでは、一回の振り返りで、臨床判断モデルに基づいた省察支援、または、承認や自立を促す場面等、またはその両方を取り扱っていた。参加観察を行った15回のうち、臨床判断モデルに関するやりとりが8場面あった。新人看護師が学んだ内容で最も多かったのは、優先順位を考えて他者に依頼するなどの「自己課題の明確化」であった。インタビューデータより抽出した新人看護師の勤務終盤の振り返りの背景にある実地指導者の意図は43のコード、17のサブカテゴリ、6のカテゴリに分類された。

【結論】

A病院では振り返りの一部は実践の最中に行われる特徴があった。勤務終盤の振り返りの前提として、新人看護師を【パートナーとして振り返る相手】と位置付けており、新人看護師に対して、【患者に変化をもたらす気づきを伝え】て、役割モデルとして方向づけ、新人看護師の目標設定や方略を見いだすきっかけになる「予見」の段階、新人看護師の心身の状態をモニターしながら、【状況に応じて内容を調整】し、新人看護師の主体性を重視すると同時に患者の安全を考慮し、【主体性と安全のバランスを保ちながら成長を支援】する「遂行コントロール」の段階、【心理的に安全な関係性を築】いた中で、学習が進んだことを新人看護師に意識づける「自己省察」の段階を経て、次の課題と目標設定に進むための「予見」の段階につながるよう、新人看護師の自己調整学習の修得に向けた支援が行われていたと考えられる。また、実地指導者は肯定的なフィードバックを感じられないといった主観的な課題を抱えながら、【効果的な指導を模索する】実態が明らかになった。これらの支援として、他の看護職者からの支援を受け易くすることで、課題を解消する支援につながると考える。